時代の正体 権力はかくも暴走する

神奈川新聞「時代の正体」取材班著

当事者として、抵抗の記録

不穏な空気をまとって戦後社会が急速に変質しつつある。安全保障法制、米軍基地問題、ヘイトスピーチ（差別扇動憎悪表現）…。この国の今を象徴し、行方を左右する問題が相次ぐ中、記者による継続取材と論客へのインタビューが「権力の暴走」を浮かび上がらせる。

２０１４年７月に神奈川新聞の特報面で始まり、現在も継続中の連載を再構成したのが本書だ。「時代のいまを見据えたい」と、権力の欺まんを見逃さない決意が固い。集団的自衛権行使容認の閣議決定から、学生らの団体「ＳＥＡＬＤｓ（シールズ）」の最近の抗議活動までを集約。事実だけを伝える報道にとどまらず、同じ時代を生きる当事者として取材記者一人一人の抵抗の記録である。

「今の政治がめっちゃおかしいぞ…略…僕は中学生の時に立憲主義を習った。権力を縛るために憲法があるってこと。でもそんなことが守られない政治がまかり通っている」。国会前、デモでマイクを握る学生の言葉が熱を帯びる。また、政治家の詭弁（きべん）が許せなかった少女はツイッターで論争を挑み、怒りをぶつけた。

立憲主義の危機に向き合い、沖縄の辺野古新基地建設問題に神奈川県内の事例も含め、終わらない不条理を問う。ヘイトスピーチ問題や「嫌韓・嫌中本」の相次ぐ出版では差別と偏見を掘り下げる。

無関心と楽観主義を見透かしたかのように静かに進む「熱狂なきファシズム」が薄ら寒い。映画監督の想田和弘さん、思想家の内田樹さん、作家の辺見庸さんらの問題提起が続く。「目を見開き、耳を澄ませ」との訴えの先に、この時代がはらむ危うさが見えてくる。（文化部・岡田正弘）

（現代思潮新社・１７２８円）

『千葉日報』（10月27日）

「記者は当事者」を貫く

新聞が売れない、読まれない。ニュースはネットで十分。もう何年もこんな声が飛び交っている。全国紙がひしめく首都圏の一角で発行される神奈川新聞の記者にとって、これは死活問題だった。

どうすればよいか？　議論し、迷い、考え直し、一歩を踏み出した成果が本書になった。安全保障法制をめぐる安倍政権の動きを、国会前で批判する若者たちの側から見る。ヘイトスピーチを繰り返す集団の異様さを、在日朝鮮・韓国人の側から見る。沖縄米軍基地の辺野古への移設を、反対する知事や住民の側から見る。こうすれば、奥行きのある現実が見えてくる。

だが、この程度のことなら、全国紙もやっている。いわゆる両論併記だ。このごろの新聞には賛成・反対両派のインタビュー記事が大きく載るようになった。しかし、これがまた面白くない。要領よく情報を処理しています、という記者の手つきが見えるばかりで、熱気が感じられない。

そこで本書を開くと、冒頭に「いまという時代に起きている事象と向き合うとき、記者は当事者そのものではないのか」とある。大事な発見だ。記者は、賛成・反対の間に立つ傍観者ではなく、時代のただ中を必死に生きている当事者であること。熱気は、その自覚からしか生まれない。

だから、現場に行く。そこで響いている声に耳を傾ける。その一瞬一瞬に、自分が何を感じ、どう考えるか、それはなぜなのか、と自問自答する。怒りもすれば悲しみもし、そういう記者自身が現場の一部になる。

本書には著名な論者たちの意見も載っている。だが、一問一答ではない。相手はどんな口調で、何を語ったか、それを聞いて記者は何に気付かされ、何に反発したかが率直に書かれている。一問一答は情報処理のコツで簡単にできるが、こちらは自分の無知や思考のクセや感情を、つまりは記者個人をさらさなければ書けない記事だ。

つまらない新聞は読まれない。面白くするには記者が生身の人間になればよい。

（ノンフィクション作家・吉岡　忍）

時代の正体 権力はかくも暴走する

神奈川新聞「時代の正体」取材班 著

（現代思潮新社・１７２８円）

『神奈川新聞』（10月11日）

新刊紹介

BOOK　安保、普天間…日本の今と行方

「時代の正体―権力はかくも暴走する」（現代思潮新社・1728円）は、安全保障関連法案、米軍普天間飛行場の移設問題、ヘイトスピーチなどに焦点を当てる。神奈川新聞の連載をまとめた同著。事実をストレートに伝えるだけの報道にとどまらない論説を発信、少数の存在や意見を無視して突き進む「権力の暴走」の姿を浮かび上がらせる。

神奈川新聞が2014年７月に始めた連載を、テーマごとに集約。安全保障関連法案については、集団的自衛権の行使容認閣議決定から、大学生らのグループ「SEALDs（シールズ）」による最近の抗議活動までを取り上げている。

法案に反対し、活動に参加する若者や憲法学者、ＮＰＯ関係者の思いを取材。「何で国民の自由とか民主主義とか憲法とか、あんなやつに終わらせられなきゃならないんですか」。国会前のデモで叫ぶ学生の言葉が、重く響く。

作家高橋源一郎さん、作家辺見庸さん、思想家内田樹さんなどのインタビューも掲載。論客が、それぞれの立場で日本の今と行方について語っている。連載は現在も継続中だ。

『山梨日日新聞』（9月13日）

『茨城新聞』（9月20日）

新刊紹介

▽「時代の正体―権力はかくも暴走する」神奈川新聞「時代の正体」取材班編

神奈川新聞が全社的に進める紙面改革論議の過程で新設した「論説・特報面」で今も続いている連載をまとめた。

2014年7月に始まった連載は180回を数え、そこからの抜粋をテーマごとに5章に再構成。安全保障関連法案や沖縄の辺野古新基地建設、ヘイトスピーチ問題などを取り上げ、深く掘り下げるとともに、事実の報道にとどまらない論説を発信し続けている。

安保法案については集団的自衛権行使容認の閣議決定から、最近の学生団体「SEALDs（シールズ）」による抗議活動まで、記者による継続取材と、論客へのインタビューで構成。思想家・内田樹さん、作家・高橋源一郎さん、映画作家・想田和弘さん、憲法学者・小林節さん、作家・辺見庸さんらが、この国の今と行方を論じている。

（現代思潮新社・1600円＋税）

『朝日新聞』（10月11日）

■時代の正体

権力はかくも暴走する

神奈川新聞「時代の正体」取材班〈編〉

1977年、横浜に米軍機が墜落し、住民3人が死亡した。その事故と、米軍基地の建設計画が進む沖縄を重ねあわせ、記者は書く。「米軍の事故で犠牲になる人は守るべき日本人の一人に入っていないのか」。在日コリアンに対するヘイトスピーチの取材から、関東大震災の時に起きた朝鮮人虐殺の実態を探り、その記憶がどう消されてきたかをたどる――。神奈川新聞の記者たちが、この時代の問題を、地元に根ざして切り取った連載をまとめた。安全保障関連法に反対するSEALDs（シールズ）の若者や、映画監督の高畑勲さん、作家の辺見庸さんらのインタビューも収録。記者は傍観者でなく、「当事者そのもの」という思いが貫かれた本だ。（現代思潮新社・1728円）

『沖縄タイムス』（9月12日）

辺野古・安保法案 連載を出版

神奈川新聞「時代の正体」

名護市辺野古の新基地建設、安保法案などについて取り上げている神奈川新聞の連載「時代の正体―権力はかくも暴走する」＝写真＝がこのほど、現代思潮新社から発売された。

2014年7月から始まった連載をテーマごとに集約。辺野古のキャンプ・シュワブゲート前や海上の動きを含め、沖縄の米軍基地について考える記者のルポ。安保法案については、集団的自衛権行使容認の閣議決定、学生団体「SEALDs」の抗議活動などの継続取材と論客へのインタビューで構成されている。税別1600円。

『信濃毎日新聞』（9月27日）

■時代の正体

神奈川新聞「時代の正体」取材班編

「時代の正体」は、神奈川新聞が2014年から続けている連載のタイトル。これらの連載記事をもとに一冊にまとめたのが本書である。

主張は明快だ。第1章の「『安全保障』の暴走」では、安保法制に反対する人びとの思いを取り上げ、抵抗の姿勢を前面に打ち出す。第2章の「抑圧の海」では、沖縄取材とともに、神奈川県で起きた米軍機の墜落事故を掘り起こし、日米地位協定の不条理をえぐる。ヘイトスピーチを扱った第3章、戦後70年をテーマにした第4章など全編を権力批判の眼差しが貫く。

一連の記事に引き込まれるのは、記者の立ち位置や葛藤を率直に表現しているからだろう。例えば、沖縄取材の際の本土の人間としてのうしろめたさ、そうした中で思い切って翁長知事に質問をした過程などを、「私」を主語にして描く。自分をさらして、時代に真剣に向き合う記者たちの鼓動が伝わってくる一冊だ。

（現代思潮新社、1728円）

『週刊朝日』（10月2日号）

『時代の正体 権力はかくも暴走する』

神奈川新聞「時代の正体」取材班編

現代思潮新社 1600円

神奈川新聞論説・特報面に2014年7月以降に掲載されたシリーズ連載を書籍化した。安保法案・米軍基地問題・ヘイトスピーチなど、近年注目された問題に関わった市民や著名人への取材記事が中心となっている。

テーマは様々だが、対象者に共通するのが問題への「当事者意識」だ。特定秘密保護法採決後、ニュースキャスターの「民主主義が終わった」という言葉に「いつ終わったんだよ」と苛立ちを隠さないSEALDs（学生団体）の男性、辺野古への新基地建設を聞き「自分の目で確かめたい」と現地に飛ぶ沖縄出身の大学生……。誰しもが、社会で進行する現実に自身の全存在をかけて向き合っている。

記者も然りだ。ヘイトスピーチ・デモへの激しい抗議活動を当初「どっちもどっち」と感じたとある記者は、参加者から「傍観者でよそごと」の感覚だと逆に叱咤され、目を凝らすために現場に通い続ける決心を固めたという。ニュースは古びるのが常だが、「時代の当事者」たちの姿勢は普遍的なメッセージとして心に刻まれる。

（松岡瑛理）